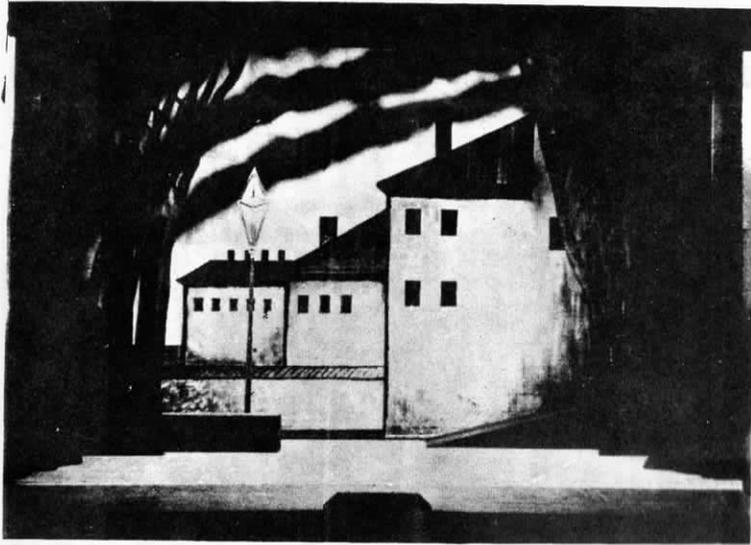


毎月一回15日発行昭和51年3月15日発行・第74号(昭和45年9月4日第三種郵便物認可)

# リベルテール

3月号



Libertaire VoL, VII. No. 4

無 政 府 主 義 誌

昭和45年9月4日第三種郵便物認可  
昭和51年3月15日発行第74号

リベルテール 定価一〇〇円(郵便料共)

- リベルテール Le Libertaire
- 1976年3月15日発行 VoL, VII No. 4
- 編集兼発行者 三浦精一
- 発行所 東京都練馬区大泉学園町2190  
萩原晋太郎方 リベルテールの会

毎月1回15日発行 振替 東京133830番 三浦精一

「日本文化革命」を考えよう

ときどき日本の今日のアナキズム運動の低迷を嘆く人に出あうが、私は嘆くのは無用だといいたい。なぜなら日本の民衆の歴史は現在のアナキスト界とはほとんど無関係のところまで動いているのだから。

アナキーこそ私たちが求めるユートピアであるが、それはけっしていわゆるアナキストたちによって意識的につくり出されるものではなく、むしろあらゆる権力や権威から解放された民衆の中に自然に生まれる秩序である。だから、いかに民衆が権力や権威から解放されつつあるかという点こそが問題なのである。民衆の運動としてここ十年來注目される傾向は、権力奪取を目ざす共産党流の大衆追従＝蔑視主義にうんざりした市民や労働者が、権力や権威そのものを否定しようとする新しい活動を始めていることである。そしてこれは、日本経済あるいは文化の高産生長至上主義、大量消費主義の破綻と重って、既成の権威、価値観を転倒させようとする「文化革命」に進んでいる。「日本文化革命」についてはすでにいろいろの意味あいでも語られているが、私たちはアナキーの実現に向かう過程として「日本文化革命」に取り組まねばならない。「日本文化革命」を経ずにアナキーの実現は考えられないのではない。

現在各地で進んでいる「日本文化革命」の課題はさまざまである。住民自治をめざす市民運動、労働者の自治管理闘争、女性解放運動、反教育・自己教育運動、出入国管理体制をつきくずす運動などなど。一見無関係に見えるが、これらの運動に共通しているものは、日本における権威主義をいかに打倒するか、という課題である。別の言葉でいえば、民衆がいかにして、政治的活動、文化的活動をして知的活動の自由を取り戻すか、ということである。

日本における権威主義の構造について、「日本文化革命」の課題について、真剣に考えるべき時ではないか。ところで、リベルテール誌は七月ごろバクーニンの特集をすることになっている。私はバクーニンの生涯の詳細や著作の文献学的考証にはあまり興味がない。ただ「日本文化革命」を考える一人として、バクーニンの思想に学びたいと思っている。

(江藤敏和)

目次

巻頭言 1

リバタリアン社会主義の経済学(2) 坂 入 純 2

地下水脈 三 浦 精 二 4

混迷と無意味の中で はしもとよしはる 9

人権とアナキズム 奥 山 孝 門 12

A・C労働者連盟について 佐 野 甚 造 13

野 火 15

# リバタリアン社会主義の経済学(2)

坂 入 純 二

今回と次回で、H・D・ディッキンソン『社会主義の経済学』(一九三九年)の一部分、「社会主義の経済問題」を訳出するが、全体を展望するために、まず各章の標題を順にあげておく。訳出部分は第一章の第四節の全文である。

- 一、序
- 二、消費財 — 需要の調整
- 三、生産財 — 費用の測定
- 四、所得の分配 — 労働の配分
- 五、公共設備の価格政策
- 六、社会主義コミュニティ内の私企業
- 七、外国貿易
- 八、貨幣と価格
- 九、均衡、価格決定、計画経済
- 十、自由

※ ※ ※

(1) 総説。社会主義社会は、資本主義社会ではいかに不完全であるにせよ、ある価格での市場における販売のための生産という方法によって解決されている諸問題を

解決せねばならないであろう。社会主義社会はこれらの諸問題に対して起源からして新しい解決を案出せねばならないのであろうか、それとも、資本主義に先行し、資本主義それ自身の下で完全になった小商品生産の時代に進展した機構のいくつかを利用するのであろうか。言葉をかえていうと、この研究の領域は、価格と価格に相互に関係するもの、貨幣と市場が社会主義計画経済に適合しうる範囲である。

社会主義経済によって価格決定が意味するものに関して、社会主義者の思考は二派に分けられる。つまり、価格を決定する過程の背後にある個人主義的な諸仮定は社会主義コミュニティには適応しないと考えるものと、適応すると考えるもの、この二つである。

(a) 第一の学派は、個々の消費者の需要計画は人間の欲求を相当適宜に表示するという考えを原則的に拒絶しようとした。おそらくこうした見解の最もみごとな表明がランズロット・ホグベンの『理性からの後退』であろう。同書は個人主義的な経済学の二つの基礎、つまり、個々人は自分には何が入用なのかを最もよくわかっているという主張、および、人間の欲求を満足させることはできないという主張を拒否し、むしろ次のように断言するのである。人間の根本的な欲求は人々に市場で財貨を

選択させることによってよりも科学的な研究によってヨリよくたしかめることができ、根本的ではない欲求は消費の階級標識(ヴェブレンの「衛生的消費」であり「金銭上の見栄」である)の結果であるか、それとも、満足を増加させることなく満足物を倍加させる利潤屋の広告キャンペーンの結果である、と。もしもこうした見解が受け入れられるならば、社会的な生産は、市場の指示に従ってではなく、人間の欲求の計画的な見通しに応じて実行されるであろう。

(さらにこれらの理論家は、人間の欲求の科学的な研究にもとづく消費の標準化はかつて考えられなかったほかに生産の規格統一を可能にし、かくしてそうした欲求を満足させる費用を大いに減少するであろう、と指摘する。このようにして、人間の消費のために必要とされる財貨はきわめて少なくない、きわめて容易に生産されるるので、それらは無料の財貨となり、経済問題はそういう名称のものとしては消滅するであろう、ということが望まれている。)後に(第二章、第一節、第三款)、私たちは欲求を充足させることはできないという考えを拒否する人々の論点を検討しよう。また(第二章、第一節、第四款で)、未来の「豊富の時代」には技術進歩によって、欠乏が廃絶され、かくして経済計算は不必要となる、

という見解を論じよう。

(b) 第二の学派の社会主義者は、入念な意識的な選択という行動で個々人自身によって解釈された、各個人のそれぞれの欲求を満足させるものとしての、リベラルな個人主義的な福祉概念から出発する。この学派は私企業よりもむしろ集産主義的な経済組織にこうした欲求の満足をゆだねるが、それは、所得の分配ならびに生産の組織を考慮するときには、集産主義の方が私的企業よりも個人の満足をヨリ多く提示することができる、と考えているからである。こうしたタイプの社会秩序をリバタリアン社会主義と呼べるであろう。この学派の支持者たちは、有効な個人主義を人間の歴史上はじめて樹立するために、社会主義を希望するのである。(つづく)

※ ※ ※

今年バクーニンが死んでから百年になるので、右のつづきを中断して、来月号からP・アヴリッチ氏の執筆したバクーニンと現代革命についての論文を掲載しようと思う。

日本のアナーキズムの歴史と言えば皆が一応幸徳秋水にさかのぼる。その時輸入されたということである。徳川時代に安藤昌益がいたといっても、農民的アナーキズムで現代のアナーキズムにつながりがないというのが常識的であるようだ。農民的アナーキズムとするところに資本主義経済学やマルクス主義経済学の発展論に毒された考え方があってはいないか。

アナーキズムは民衆の思想だと誰もが言う。しかしその民衆というものをどう考え、どう捕えているのだろうか。日本人として、そして日本の民衆の一人として、民衆（庶民と言ったが良いかも知れない）をどのように構成しているのだろうか。考えて見れば、そこにおそろしく食い違った考え方があのように思われる。それほど民衆というものの様相は複雑である。

このアジアの一角に住みついた人々、流れて来た者、追われて来た者、様々だろう。しかし皆それぞれに自尊心や誇りを持ちながらこの吹きだまりの島国で一つの民族に形成されて行った。騎馬民族に征服されたこともあっただろう。しかし数千年の間に一つの言葉を話す一つ

の民族になった。考えただけでも複雑な構成、複雑な遺伝要素をもった民族である。そして古い時代から支配、被支配の関係が出来ていて、それがいつか天皇支配に統一された。天皇を中心に支配階級は幾度遷を繰返している。その下に支配される者としての庶民、搾取される者としての民衆がある。数千年の被支配者としての民衆の歴史を諸君は考えたことがあるだろうか。諸君が教えられた歴史は政治史、マルクス主義的経済学による教条的な史観、それに英雄物語ではないか。すべて支配階級の歴史である。民衆の生活の歴史は民俗学によって、つい最近緒についたに過ぎない。民衆の精神史は、民衆の宗教の中に探らねばならないのだが、宗教自体が権力に妥協するというものもあって、なかなか正しい把握はむづかしい。民衆の思想としてのアナーキズムの歴史も、安藤昌益、幸徳秋水、石川三四郎、岩佐作太郎などの英雄の歴史であってはならない。こうした輝かしいヒーローの下でうごめいたのが民衆だ。身体を張ったり、反抗したり、裏切ったり、叫んだり、泣いたり、歌ったり、そこに民衆がいる。民衆は天才的でもあり、愚鈍でもあり、狡猾でもあり、卑怯でもある。そして一つの社会をつくらせている。そして皆がそれぞれに宗教を持っていると思

「私は仏教徒です」と言い「家は多分禅宗だったはずだから、死んだら近所の禅宗寺にたのむ」と言う。「曹洞宗ですか、臨済宗ですか」と聞くと、「さあどちらですか、同じ禅宗ならどちらだって良いですよ」と答える。

都会に出て来ていれば、これで済むが農村に帰るとそうは行かない。寺を中心にいるいろいろな共同体の結びつきがあり、神社の祭礼もある。この神社はいつから、どうしてここにあるのか聞いても分らない。とにかくそこにあるから拝む。家はどうして日蓮宗になったのか、また浄土真宗になったのか、そんなことは分らない。とにかく真宗だから真宗で葬式をする。そして村のすべての行事はこうした寺や神社を通して行われている。こんな所にキリスト教の伝道師が入って行っても、家の宗旨は何宗で、これを変えては御先祖様に申訳ないとはねつける。共産党のオルグとして農村で活動したエスベランチストの伊東三郎さんがどんなに苦勞したか、想像に余りあるものがある。明治初年熊本に来たジェンス大尉に感化されてキリスト教徒になる決心をした青年たちのある者は、父に短刀をつきつけられて切腹を迫られた。こうした中で十二人の青年は花岡山で、日本にキリスト教を弘める血盟をした。この人々が日本のキリスト教の一つの基礎をつくっている。一つの別の宗教を受け入れるというこ

とは、個人にとっても家にとっても生活と思想の方向転換であり、一つの革命である。（主権者交替という意味の漢字の意味や権力思想での革命でなく、レヴォリューションという本来の意味での革命である）。

今、東西本願寺の偉容を誇る浄土真宗も、十三世紀に開祖しんらんが布教をはじめたのは、源氏三代が終る頃で、日蓮はこれより少し早かった。彼は鎌倉で法難に会っている。現世利益も説く日蓮宗は多く商人層に食込んだが、真宗は主として農村に入って行った。地縁的、血縁的に農業共同体を形成している農村に入りこむことは、前にも言ったようになかなかむづかしいことである。しんらんは一つの核をつくり、それから次第に教の輪を拡大させて道場をつくり、村から村へ、道場をつくり、講をつくって行った。彼は寺院仏教の否定者であり、「善人なをもて往生す。いわんや悪人おや」と善人往生の宗教を百八十度転換させた「悪人正機」の唱導者だった。道場や講は村の生活の中心になった。農村共同体はここに運営の中心をもった。こうして当時の困々に拡がって行った。しんらんの悪人正機の考え方は、キリストにも見出される。彼は一緒に十字架にかけられた者に「汝は今日私と共に天国に往く」といっている。そして彼は漁師たち弟子とし、非国民と言われる収税史の家にも行き、

彼の前に引き据えられた売春婦のために、「君たちの中で罪を犯したことの無い者が、この女を石で打て」と叫んだ。だからこそ信者たちはキリストの死後共産体をつくったのだ。イエズスは「笛吹けども踊らず」と嘆いたこともあったが、民衆はその心の深みにイエズス自身を受止めていたのだ。

しんらん以後二百年位して一向一揆が起っている。その頃信者が増加して当時の一国全部を占めるところも、何ヶ国があった。そして「百姓のもちたる国」と言われた。しかし、しんらんの子孫が世襲的に教主になるために一つの教権国家になる危険性をもっていた。第八代目の蓮如は二十数人の子女を持ち、十三人の男子に各地の寺院を与え本願寺を中心とするヒエラルシーをつくり上げた。寺院仏教を否定したしんらんへの反逆であり、政治的な一向一揆への基盤をつくったのだ。

一揆が起る少し前の頃、近江国堅田の本福寺の僧明誓は「諸国ノ百姓ミナ主ヲ持タジ持タジトスルモノ多アリ、京ノオホトノヤノ衆モ主ヲ持タズ」と書き、「侍モノノフハ百姓ヲサゲシムルゾ」と結んでいる。農民信者たちは一国全部にわたる程に数が増していても「百姓のもちたる国」に主人を欲せず、武士階級への反感を表明しているのである。ここに民衆の本当の姿がある。この民衆

を本願寺は「しかる上は仏法のために一命惜しむべからず、合戦すべき由・・・」と、武器を持たせて戦争に捲きこむのである。この一向一揆も織田信長との死闘に敗れた。この一向宗の勢力を恐れた徳川幕府は、第十一代頭如の子を東西両本願寺に分けて、たがいに牽制させた。京都の商人たちの中に受け入れられた日蓮宗も天文法華の乱にまきこまれた。

しんらんの書いたものや新約聖書を読むとき、私はいつもそこに民衆の心にしみ入るものが何であったか、民衆が心の底から「私の叫び」としてあげることのできるものを見出す。しかし教団が出来、寺院が整備されて政治体制の中に座を持つようになると、民衆と共に脈打つものでなくなり、教会のために、寺院のために民衆を持つようになると。民衆から浮上る。民衆にとっても家の宗旨は禅宗だったということになる。宗教を否定する人たちはこうした形骸宗教を攻撃し、否定するのである。こんなことはしんらんも、キリストもやった。しかし彼等は単に否定しただけでなく、それに代るものとして真の民衆の声をあげているのである。宗教は民衆の阿片だなどと利いた風な駄洒落に迷う者こそ馬鹿だと言うべきだろう。クロボトキンの親友だったエリゼ・ルクリュは大地理学者と言われるだけに、世界の諸民族の間

に宗教が果して来た機能を十分に認識していたようだ。バクーニンもフラタニテの集団をつくろうとしている。十九世紀思潮の影響で彼等は皆母の宗教であるキリスト教をすててはいるが、乳児のときから彼等をとりまいたキリスト教的環境の影響は否定できない。彼等の倫理観はそのままキリスト教のものなのだ。

私共が考えねばならないのは、宗教が何故こんなままで深く、民衆の血を流させるまでに滲みこむのだろうかということだ。それはしんらんにしてもキリストにしても、民衆の中に生き、民衆の心の声をあげるからだ。彼等は外から民衆に命じて歌わせようとはしなかった。彼等は民衆の中で民衆とともに祈り、民衆とともに泣いたのだ。

一神論とか多神論とか、そんな理窟はどうでも良い。存在するのは民衆なのだ。民衆の社会なのだ。デュルケムは宗教生活の原初形態の結論で、神は社会だと言った。

いろいろな複雑な遺伝的要素をもった人間をとりまく自然的環境、社会的環境があり、その中で人間は集团的動物で、お互いの動物的生命、植物的生命を認め合いながら、精神的風土をつくり上げてゆく。本能的に保守的である反面、それを破る進歩性も反逆性も持ちあわせている。天才もいれば白痴もいる。不具者もいればギリシ

ヤ彫刻のアポロのような美しい肢体を持つものもいる。不公平、不平等に生れついているが、同じ人間として生きる限り、生活には平等と公正が要求される。その平等は角力力士と虚弱者の食欲が満たされる異った分量の食物が平等とされるので決して等量が公正なのではない。人間は本能的にこれを知っている。こうした人間の生を貫いて芸術が生まれ、形式が構成され、倫理が求められる。

宗教には必ず倫理と形式とが伴っている。社会に不正があり、不平等があるときに、人間の自由の、人間の救（解放）の要求として宗教が現われることが多い。ドイツの農民戦争もそうだった。体制化して権力の侍女となつた宗教には何の求める所もない。私共は庶民が宗教に何を求め何を期待しているかを知らねばならない。

しんらんが道場と講によって農民をオルグし、それが農民の生活の中心になって行ったことは前に言った。そこには仕えるべき主人はなく、皆が共に念仏し、共に語る場があった。これがコミュニティとその中心である。コミュニティはフランスでは行政の単位となっているが、もともとと同じ教会でコミュニティオン（聖体拝領）キリストの肉と血を受ける）をする人たちの村落である。アンジェラスの鐘が響きわたるとき人々は働きの手を休めて、晩禱

を捧げる。そこには主人はいない。コミニズムはこうした所にその言葉の起原を持っている。石川さんはこうした土民の生活を求め、また土民哲学を書いた。

単なる神の否定が宗教否定ではない。東洋の多神教は一神教の否定であり、仏教も禅宗などは無神論でさえある。十九世紀的に神の存在の証拠がないからと否定したのでは、神の非存在の証拠もないではないか。神は居ても居なくても良い。人間が居て、人間の間に喜び、悲しみ、社会に不正や不平等が存在する限り、宗教は存在し続ける。

アナキズムは決して宗教ではない。それは人間の社会に現存する不正や不平等に対しての人間の理性的追及、そしてその解決のために考えられるものである。マルクス主義やレーニン主義などのように、その学説と称するものへの信仰を強要しない。ドグマであることを極力避ける。一つのドグマを信じることは他のドグマへの攻撃となつて、現に同じマルクス主義者が解釈の相違をめぐってゲバっている。これは墮落した宗教裁判に等しいもので、それこそ百八十度の転回を必要とする。

アナキズムは人間と人間の社会の注視から出発する。そしてそれが如何にあるべきかを考える。しかし人間という迷蒙にみちたものの努力だから決して完全なもので

加わつた。支配と被支配の現実が変りなく続いている以上、被支配者の叫びに脈絡が切れるということがあろうか、切れているように見えるのは、そうした文献が出ていないというだけで百姓一揆はいつでも起っていたのだ。「反抗の地下水脈」は絶えることはない。それがアナキズムだ。大杉はアナキズムに触れたとき、労働運動を考えた。彼は都会生活者でインテリだった。アナキズムに随伴して現われたフランスのサンジカリズムに目を向け、庶民の、その中の労働者の反逆の組織化を考えた。多くの天降りのな当時の労働組合運動の中には、水沼、布留川、綿引などのように自分たちで組合をつくりそれが大杉のアナキズムの中に自分たちに共通し共感する理論を見出した者たちもいた。

戦後の社会は急激に変化している。日本だけでなく諸外国ともに、支配体制にも、被支配体制にも微妙な変化が起っている。資本主義は国際的な搾取網を拡大している。商業主義的経営や風潮は日本の農業にも変化を及ぼしているように見える。しかし支配と被支配の体制には変りはない。私共は今一度私共の過去をふり返って日本的な反逆の形式を現在の状況に照して考察する必要があるだろう。

もなく、完全なものにもなれないだろう。これは人間自体の制約でどうにもならない。アナキストは経済学でもまだアナキズム経済学と呼べるものを持ってはいない。完全でもないものを完全に思い込ませて民衆を支配しようとする所にマルクス主義者共の権力意志がある。こうしたドグマ信仰を排して、自己の不完全さを認識するからこそ、最善を目指しての同志愛があるというものだ。

安藤昌益から現在のアナキズムにつながりが無いと言われていると最初に書いた。そしてそんな考え方をすること自体が、資本主義やマルクス主義の段階論に毒されているのだろうとも書いた。考えても見るが良い。真宗の信者たちが「主を持たじ」と求めたこと、昌益が当時の体制否定を考えたことの間に何の脈絡もないかどうか。その間に何百年かのへだたりはあっても、圧制の下に生きねばならない庶民の要求は変わっていないのだ。権力者の支配体制も同じなのだ。勿論権力者同志は絶えず争うから、その交替はあっても騎馬民族でも卑論争でも天照でも天皇でも、幕府でも、大名でも、常に支配者があつたし庶民（主に農民）はいつでも被支配者だった。それに近代になると資本家が政府に密着して支配者となつて、被支配者の主体だった農民に工場労働者の一群が

### 混乱と無意味の中で：

あるかなしかの小冊誌に拠つて、送られて来る原稿や周囲の人間関係から判断すると、わがアナキズム陣営の低調ぶりは、眼もあてられない状況である。むろんそれだからこそ、アナキズムを守れ：などと高唱するつもりは少しもない。また精緻な理論がないから、運動の展望を切り開く能力に欠けるから仕方がないのだ：と自嘲する程目暮趣味は持ち合わせていない。だが社会環境がロッキード社献金問題にみられるようにボルテージを上げればなしの時に、民衆にインパクト（衝撃）を与える術をもたない民衆運動としてのアナキズムとは何なのか：と考えてみる。その第一は戦後の運動と名づけられるものの特徴が人員の動員数にあることだろう。これは組合運動から色々なニューアンスをもった反対運動までその実力、示威行動が警視庁調べと主催者側の発表で知らされる数字で評価することである。個人の意志表示は数値に翻訳されて初めて効力を発するといふのである。量が質に転化するのには条件の変化に依つて可能（加熱、加圧、攪拌、または核反応によって、分子構造は変わる）だとしても、人間の大量動員で質が変わるのだとは信じな

いのがアナーキストだ。ではきような構造に対し代替は  
何だろうか？ 言うまでもなく少人数による（各自が権  
利を主張し他によって認められ、その範囲で自己の責任  
が明確にできる規模）組織とその連帯による共働行動で  
ある。これが末だにできていない。何故できないのか。  
答の一つは作ろうとしないからだ。またよく全国組織だ  
とか連盟をあげるが、私からみればその熱意の程は高く  
評価できるにしてもアプローチの仕方が不十分なように  
思われる。まず自分の所属するグループでの自分の在り  
方（主体性）が明確でなく、従ってそのグループの方向  
性がでてこない。時にたとしても他のグループや個人  
と接触すると忽ち自己がいまいになり、他の個人また  
は他グループの攻撃に終始することになる。違いを明ら  
かにするのは大事だが、それによって人間関係までもぶ  
ちこわすのは、決して賢明だとはいえない。自己の挫折  
は自己のものであって、他に及ぼす必要はないどころか  
運動にとって一利なしと心得るべきである。次ぎの欠  
点は大所高所からの理論だ。総論では一致できて各論で  
は一致できないとはどういうことか考えてみる。その答  
えは各論の組立てをいい加減にして（決してさぼってい  
るとは言わない）いきなり総論で見切り発車をしようと

とりよがりの理論を弄ぶより先人につき謙虚に学ぶべき  
で、そこを働か抜けて発展させ得なければ自己の個性や  
天分のなさを歎くしかならう。また繰返して言う、  
人間は個性や天分だけで日常性を生きているのではない。真  
実を言えば生の細部は個性や天分を打消す条件の中でし  
か生きるしかなく、それを打ち返しはねかえし時には屈  
服しながら、また立ち上がって、それこそ泥の中を這い  
づり廻ってでも生きなければならぬのだ。アナーキズ  
ムの有効性はそこで開花するのであって、書棚に飾られ  
た本の中にひっそり閉じこめられているものではない。  
閉じこめられている護符ごふを解くのはきみであり私であっ  
て、それは生活の経験が教えて呉れるだろう。バクも言  
った。

：民衆にとって、すべての成人にとって本場の学校  
は人生である。自然であると同時に理性的な唯一の  
偉大で全能の権威とは、われわれの尊敬に値するも  
のは、成員のみがお互いに尊敬しあうことに基礎  
を置いた社会の集团的公的精神であろう。そうだ、  
それは決して神聖なものでなく、人間的なもので、  
われわれはそれに心をひかれるだけでなく、また奉  
仕するのではなく、それが人間を解放するのだ。：

（神と国家）

することだろう。一篇の小説の構成でも細部（デティール）  
の描写がおろそかであったは例え何百枚の原稿用紙を費  
した長編でも時間つぶしの役にさえ立たないと言う、  
それと同じだ。アナーキズムは下から上へであって決し  
てこの反対ではないとはブルードンやバク、クロが教え  
ている。わが石川三四郎は人間的理論は人間を制御す  
るために作られるVと心得ていたとある弁護士が回想  
の中で知らせて呉れた。そこまで極言しなくても理論に  
よって人間を動かせると信じるのは、テコの支点さえみ  
つかれば地球だって自由に動かせるとする幻想に似てい  
ないだろうか。

これに対応するのがアナーキズムは理論じゃない、思  
想ですらない、そんなものは知らなくても自由に好きな  
ように闘うことだとする発想である。けれど個人の体験  
は限界があるので、またその体験を普遍化するのが、共  
有して更に深化させ発展させる為に歴史があり、伝統が  
あり、抽象化して所有する理論があるのであって、その  
意味でAボードレルの一句は現実まことに勝るVと自覚する  
のも大切である。まして人間の習性として歴史に学ぶこ  
とが少く、傷ついて始めて後悔するのが普通だとすれば、  
転ばない前に現実まことに有効な理論から学ぶのは重要である。  
私達に欠けているのはこの種の理論であって、空疎なひ

：私は信じている。人間の知性、道徳、物質的發展  
による豊かさ、それにその明瞭な独立性は、すべて  
社会における生の所産である。社会の外で、人間は  
自由である訳はなく、真の人間にも変革できない、  
その意味は自覚的な存在、自分で考え発言する人間  
になり得ないということである。集团的に知性と労働  
を競い合わなければ、人間の原初性質を構成する  
発展への出発点になる野蠻や粗野な状態から抜けで  
ることができない。私が深く信じているのは、人間  
の生の中には、利害、傾向、配慮、幻滅、愚かさ、  
それに暴力、不正義等、表面的には自由気まゝなも  
のとして現われる行為のすべては、社会においての  
人間の生には運命の力として表象される。（そうい  
う社会においての）人間は相互に独立の観念を認め  
ることが出来ないし、外的自然の現われが組合はさ  
れ影響しあうのを否定することもできない。

自然の中で、現象のこの驚くべき関連性と組合せ  
を打ち破るには、確かに闘争がなくては叶わぬこと  
である。それどころか自然の諸力の調和とは、この  
種の絶えまない闘争の成果にしか現われぬのだ。  
（故に）闘争が生と運動の条件である。自然におい  
ても、社会においても、闘争のない秩序とは――死

である。

(バリ・コミュニケーション)

混沌と無意味の中で私達にはまだまだすべきことが多くあるようだ。アナキズムの復権とノンセクトラジカルの夢が未来論と共にいるか彼方に没し去っても、どっこい俺らは生きているんだ。

(文責はしもと)

## 人権とアナキズム

奥山孝門

人権という言葉はむずかしい。だいたい人権の「権」という言葉は権力につながるので我々の肯定できないところである。本来「人」は「必然」であり「権」ではない筈である。だがこゝでは好ましくないが人権という言葉を使うこととする。人権は強く主張すると貪欲になる。厳密に言えば今日社会では、自分の人権を主張するときにはどこかで他人の人権を侵害することになる。理想的には人権の主張は相互に他人の人権を主張し守ることによって全体の人権が守られることになるような人間関係

の社会構造でなければならぬ。だがそれは今までの考え方では不可能だ。

なぜなら「人権」という概念には「生活権」が含まれているからだ。元来「生活権」は「生存」に脳の思惟、認識細胞から発現する二次本能ともいえる「欲望」を加えた、人間特有の雑多な権利ということになるからだ。「生活権」は、「生存必然」(+)「欲望権」のことで、個人個人によって非常な差がある。医者のレストランは悪か善か？ 国労のレストランは？ 銀行員のレストランは？ — 当事者と被害者の立場はいつも逆になる。労働者の生活権を主張する為に多くの他人の生存必然と欲望権が侵害される。だが資本制度のような交換経済制度が基本経済原理である限り、人権は強く、そしてますます強く主張されることになる。それがたとえ他人の人権をおかしても、傷つけても、収奪する結果になってもしかたがない。だから真の平和社会はなりたない。現在社会では人権を主張しなければ、資本に生活権どころか生存の必然もうばわれてしまう。

「生存」になると違ってくる。生存には「食」「衣」「住」は必然だからである。欲望は生存の必然をみたした後、社会の生産度合に適合するよう節度をもって充されるべきこととなる。しかも生存に不要な又は害悪な欲

望は次第に権利としては勿論認められなくなる。又そうした欲望は生存を原理とする教育によって次第に消滅することになる。

「人権」、「欲望権」、「生活権」、「生存必然」、この考えを整理してアナキズムを考えてみる必要があるのではないだろうか。

【参考図】

「純粋生存」+「一次本能」(運動、基礎代謝)

=「生存」

「生存」+「二次本能」(欲望) = 生活

純粋生存は科学的な反動的原理。

数学の0(零)と考えればよい。

## A・C労働者連盟について

佐野甚造

A・Cに最後まで残ったのは、武・村上・北浦・鍋木淳で、どうもA・Cでは横倉の顔はみなかったと思う。この点、先日北浦と会ったときに確かめたのだが、そうだった。自分の知っている横倉君というのは、もと江東自由において、須藤というのと一緒に浅草の三友館のレヴェー

自分がアナキストになったのは、岡崎竜夫の影響である。私の兄が電気学校に通っていて、その友人の萩谷君と二人で岡崎がよく遊びに来た。十五の時だが、彼はヒゲを生やして、若いのにいかにもいかつい斗土面をしていたが、人間は気のやさしいところがあり、心情的なアナキストらしいところがあったので、その思想に自分は感化された。

### 黒斗社と岡崎竜夫

新宿の十二社桜山に、黒斗社を岡崎ら加藤陸三、斉藤修造らと作り、その後これは幡ヶ谷の二軒屋に移った。自分もそこに最後の一人になるまでいた。その時、加陽の宮の家と林伯爵の家とかが、水道通りを少し入ったところにあり、林家を掠しようとして岡崎君が加陽の宮の家とをとり違えて、失敗したことを覚えていた。二軒屋で黒斗社の看板をかけたなら、特高がなんだなんだというので、絵の研究団体だといってゴマ化するために、村山知

義がマボウという絵の運動をやっている、齊藤君が画心があって知っているものだから、村山君のところで借りてきて飾っておいた。

神戸で君（白井）が知っている黒斗社が大正十五年にあったというのが、岡崎が関西に帰って、神戸の増田君のところでの看板をかけていたのではないか。東京での黒斗社昭和十三年ころと思う。岡崎竜夫と黒斗社はそういう意味でつながっている。

### 近憲について

近藤憲二君については自分はどうも虫が好かなかった、われわれ労働者を見下しているような風があって肌合が違っていたからである。木挽町の印連の事務所には、延島君が母親と住んでおり、二階が我々の事務所だった。そこは集会をやるというよりも、連絡場所で我々が出たり入ったり寝とまりしていた。延島とは運動のことなどあまり話しをしなかったたのでどうという印象はない。延島君のオッカサンとはよく口喧嘩をしたが。

印刷工の事務所は、和田栄のところが一ヶ所あり、あの妻君とはよく言い合いをしたものである。

近藤君はあまり好かなかったが、その後私が大森で生活思想をやっていた頃に、労連が近くの梅屋敷に移って

場に働いていたが。身の危険を感じ行方不明になった。

× × ×

黒斗社解散後、新宿の小滝橋の所に新聞連盟を作り、目に余る新聞ゴロ。当時の新聞店主はみな新聞ゴロであった。五・六人で各新聞屋に入った。僕は、大井の読売。当時の読売は朝刊だけに入り、後横浜印刷組合の浜松君の所に行き、横浜黒色一般労働組合及横浜市従業員一般労働組合を若杉其の他十名ぐらいで作った。一年ばかり居て、大正か昭和初めに中国出兵があつて、出兵反対をやり、憲兵の特高に追われ、大宮の望辰のところへ逃げて行き、後に大森に来て東京電灯南部営業所、今の大曲支社に東電従業員組合を作り、中の有志と東京ガス工組合蒲田営業の有志をさそって生活思想研究会を作り、雑誌「生活思想」を発刊、創刊は昭和五年七月であった。

## 野火

☆雑誌の紹介☆

ハジャクリイ通信V 七五年八月六日広島における反戦情宣行動の記録を載せている。広島で一人で黒旗をたてピラをくばった時の記録であり、その総括を「ドジな方法」と語る。僕はそういうことをなかなかしようとし

きたので、いろいろと接触があり親しかったが、あの人は自分の思想というものは決して発表したことがない人だ。いろいろと思ひ出話しは書いているが主張的なものは残っていない。私はアナ連に二回ぐらいだったかもしれないが顔を出して近憲に会った。金を「平民新聞」の購読料としてなら出すが、アナ連の会費としてなら出さないといったことがある。アナ連に参加しなかったのは、どうも今から考えると、労働者と違つた肌合に反撥したからではないかと思う。

戦後、戦前の古い同志だけの十二月会というのを作って二年ぐらい続けた、集まりもよかつた。アナキストクラブも、最初発意したのは自分だったか、その後若佐老人の問題であつたのでその後は行かなくなつたが。老人といえ、どうもアナキストの先生たちは天皇制というものに、なにかハッキリしないものがあつた。あの「本」を出したときに、なんであんな転回をするのかと文句をいいに、老人のつとめている目黒の会社へ行つたことがある。銀座で焼き鳥屋をやっていた後に、そこで知りあつたのか（？）その会社の社長にいわれて一時そこへ勤めていた時代だ。その点、労働者はどこへもぐつても生き延びていくが、ああいう人は生活のためにあつた風になる危険性がある。じぶんはその頃徴用されて工

ない僕の方をドジと思う。がんばらなければ。（大阪府住吉区杉本町2の8 丸恵荘 ジャクリイ社）

ハ自立V 自立は長野高教組の内部告発、サークル自立の機関紙である。「組合内部での批判活動を自から行なうこと」によって「組合民主主義の多数決ファシズムへの転化」を身をもって防ぐため全力をつくして批判活動を展開する信念で発行。八鹿高事件や部落問題から更に意識化されたサークルとして教育の内部告発をせんとしようとしているように見える。物心両面の支持を求めている。年間送料共二〇〇〇円、会員は月三〇〇〇円。（長野市篠ノ井布施五明一六〇の5 サークル自立連絡事務所）

ハパーソナル・マガジンVピク 興味の起る記事を書き、同時代性をもつ雑誌として作られている。思想ではなくセンスのよいものに、とのこと。字が小さく手書きの読みづらさはあるが写真にとつて印刷してあり、装丁はきれい。山部嘉彦さんの感覚の結晶。（定価二五〇円）一号二号が発行されています。住所は近く変わるようなので追って紹介します。

☆あんない☆

千葉県館山市に「かにた婦人の村」があります。ここは婦人保護長期収容施設で先天的、もしくは後天的、身

体的、精神的、経済的などの抑圧の結果、保護を必要としていた女性の「コローニー」なのです。作られてから約一〇年が過ぎ、今、自覚としての危機がきており、機関紙「かにた便」を発行しはじめました。かにた婦人の村ではかにた後援会に加わり、かにた婦人の村の必要を知って欲しいのです。機関紙は一部一〇〇円です。後援会員になって一口、年額A一万円、B五千円、C三千円。(千葉県館山市大賀五九四 かにた後援会 郵便振替 東京3120569)

#### ★無政府主義★

△無政府主義運動V 日本アナキストクラブは五年ぶりに機関紙「無政府主義運動」を発行した。六三号である。クラブはほとんど毎月例会をもち少数者ではあっても会話の場を維持してきた。今回の復刊はそうしたつかかさねの中にある。先年綿引邦農夫さんがなくなり連絡先は女屋さん方に変わったが、再び機関紙は出されることだろう。(東京都目黒区目黒本町一の十の三 女屋方)

△黒旗の下にV 本誌は自協(日本労働組合自由連合協議会)の意義と反省、そして人民の意識の流れを掘り起すために発行されている機関紙だ。白井新平さんの個人的色彩が濃いためそのような内容になっているが、同じアナキズムを理想としながら二つに分かれた戦前の

アナ系労働運動の歴史を見るのには便利な機関紙だろう。(東京都文京区後楽2の7の5 シライビル)

#### 海外だより

2月号のバク特集中の△防修防反Vは筆者の記憶違いで△反修防修Vと訂正する。修正主義に反対し修正主義を防止しようとの意だ。一月以来人民日報を解読しているが(味読するとこまで行っていない)年頭の毛主席の△小鳥問答Vと9月の周氏の訃報が最大事件で、これに平行するようにいわゆる走資派批判が連日紙面をにぎわしている。記事から分類すると、1.批孔批林・投降主義(水滸批判) 2.教育路線修正反対(清華大学、北京大学、各種幹部学校生徒・OBによる毛氏の△教育は革命を要すVの支持の誓い、3.工業は大広、農業は大塞に学べ、この三方面を貫くのが反修防修でその具体的像が走資派ということだ。水滸の宋江批判では彼が農民起義(蜂起)の指導者でありながらある時期から皇帝の親衛隊長に成りさがり黒旗をついだ(注意/黒旗は修正主義の旗じるしなること、これが黄旗になっているとの説もあるが筆者未見)とされ、教育革命では科学技術者から提示された智育第一は資産階級のものとしている。

#### 「バクーニン」特集について

2月中旬編集人達の間で特集で何をするか、何の目的でやるか等、話し合いました。更にバクに就いて詳しい坂入君とも個別に話し、協力の快諾を得ました。その概要を記すと、何の目的と言われても、とりたててあげられない。本年がバクの死後百年にあたり、その記念号にするのが所期の考えです。それで少くとも編集人達は何かの論文を読み、感想や意見を出そうとも話したのですが(選集の出ている事だし)どうした訳かはかばかしい返事が得られません。坂入君は△われ等のバクーニンVと題した訳詩を載せたい、また△Bの日本滞在について新村、板橋、木村、久保、逸見の諸氏によって紹介されなかった新しい幾つかの事実Vの新資料を提出するそうです。それで掲載項目は1.巻頭詩 2.写真集成 3.感想文 4.バクーニンの言葉 5.年譜か伝記スケッチ 6.バク対マルクス等の試案ができました。その後江藤君の調べで大島さんが復刻した△労働運動Vにバクの死後50年を記念した文章があって、近藤憲二、石川三四郎、八太舟三、久保謙等署名記事を見ました。

バクの思想と行動については多くのデマと悪罵があるようです。その大部分は彼の生存中からマルクスの陣営で意図的に作られたもので、彼をしてルンペンプロの蜂起主義者、ネチャーエフの同調者、フリーメソンの流の秘密結社好み、それに総破壊の使徒であるとする類です。いずれも部分的には当たっていると思うが、それだけでは

彼を知らないといえるし、また知たらどうだと言う議論がでるでしょう。実際そういう意見もあって、△バクを知るには露文、仏文、独文、伊文が読めなくちゃ判らないんですか、じゃあ総破壊の使徒と理解してその積りで行動する人があったっていいじゃないですか?V△アナキストであるためには、ブルードン、バク、クロを讀まなくちゃいかんのなら、一生かかってできやしないよVいづれもつともな説ではある。私達には語学的ハンデイがあるためこれまでバクを良く知ることができなかった。彼はヨーロッパで生き革命するのにフランス人にはフランス語で、ドイツ人にはドイツ語、イタリア人にはイタリア語で自分の意見を述べ協力を求めたのです。そのため、ギョム、マラテスター、ルクリエー、ラシダウア、ネトロー、モスト等の善き支持者と同調者を得ました。私達だって訳文を通して、よりよく彼を理解することはできる筈です。幸い六〇年代以来、同志宛に一日廿六通の手紙を書いたと言うバクの書きもの、断片が出版されています。通読して判るのはバクはその思想においてニーチェ、キエルケゴール、ハイデッカ、サルトルの先駆者であり、反逆精神と行動ではその組織論も含めて、アナキストの教父です。アナキズムとマルクシズムが共にプロレタリアートの解放のために闘うとして相容れないのは何なのか、それこそバクの言う△原則Vの問題であって、第一インスターでのマルクスとの確執が気質やヘゲモニー争いだなんて、小さい小さい△特集ではそこを明かそう。原稿切は四月末日です。(Y記)